

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和2年7月15日現在

機関番号：
研究種目：奨励研究
研究期間：2019
課題番号：19H00047
研究課題名：林竹二の授業実践に関する研究—実践記録、資料に基づいて—

研究代表者
松本 匡平 (MATSUMOTO, Masahira)
ヴィアートル学園洛星中学校高等学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）（直接経費）：490,000 円

研究成果の概要：

教育学者林竹二（1906-1985）が残した膨大な授業実践記録とそれに付随する資料を画像として総計12万枚以上をデータ化した。劣化が進んでいた資料を保存できたことは、今後の林竹二研究の土台となるだけでなく、林が進めた「教授学」の目指したものと課題、さらには日本の教育実践史の一端を明らかにする可能性がある。

今後の課題として、個人情報の保護の観点に基づきながら、どのようなデータの保存、公開が妥当なのか、さらに研究を進める必要がある。また、林への兵庫県教員の部落解放研究の影響、林自身が選ばなかった感想文や写真を手がかりにこれまでとは異なる視点から林の教育観、授業観を明らかにしていきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義：

林竹二の残した実践記録や学習者の感想文、その付随資料は、教育史・教育哲学の研究者である林ゆえの細やかなものであった。その資料をデータ化できたことは、資料劣化や散逸に対応できるばかりか、原資料の保存自体にも役立つだろう。

特に、授業を創造するとはそもそもどのような営みなのかが、林の実践と資料分析を重ねることで浮かび上がってくる。教育実践史にとどまらず、授業実践における記録の重要性、アクティブラーニングやカリキュラムマネジメントの重要性が増す現代だからこそ、データ化した資料を分析し、林の提唱した教授学や実践に新たな視点を加えることで、教育・授業の本質の一端が明らかになるだろう。

研究分野：

教育学、教育方法学、教育実践史、国語科教育

キーワード：

林竹二、教育実践記録、授業論、教育実践史、教授学、資料のデータ化

1. 研究の目的

哲学者、教育学者である林竹二（1906-1985）は、宮城教育大学学長に就任以来、授業の現場がどのようなものかを実体験すべく、附属小学校中学校にはじまり、数多くの授業実践を試みた。その実践である「開国」「人間について」など、世間で広く知られたものとなり、著作も数多く刊行された。

林がその実践において明らかにしようと試みたものは、学習者個々の問題意識に深く入り込み既成の価値観を揺さぶるような問いかけを授業の中心とし、学習者の学ぶ力をかけがえのないものとしてとらえ、学校教育や授業者が抱える問題点を明らかにすることであったと言える。その問題点を明らかにするための道具であり根拠が、林の授業に対する学習者の感想文と、学習者の授業中の写真であった。

平成26年から2年間、私は京都大学大学院教育学研究科修士課程に在籍し、「林竹二の授業論——思想形成過程と実践に注目して——」と題する修士論文をまとめた。中学高校の国語科教員として生徒たちと過ごす日々の中で、自分の教育に対する関心の原点ともいべき林の言説にいま一度着目し、その思想形成過程と実践を通じて現代教育を見返した時、どのような問題点が明らかになるのか、という課題意識があったからである。

この論文作成を通じて明らかになった課題は、林や斎藤喜博、高橋金三郎らが中心となった、

宮城教育大学を中心に形成された「教授学研究の会」の再検討の必要性、日本教育史のなかでの林の実践授業の位置づけの再検討、そして、林自身の残した膨大な授業実践記録とそれに付随する資料の分析・解明である。現在、宮城教育大学図書館に蔵されている林の所有していた資料は、学習者の感想文や講演会記録など、膨大にして多岐にわたるが、未整理のまま保存されている。私は、まずこの未整理の資料をデータ化し、必要に応じて分析対象にできるような形で保存するためのきっかけを作りたいと考えている。林が所有していた 1980 年初頭から数え、早くも 40 年近い月日が流れている。散逸や破損を防ぐべく、早急に原資料の保存を行うことが必要であるとともに、その資料から浮かび上がる林竹二の授業実践の過程、「教授学」の目指したものと課題、さらには日本の教育実践史の一端を、資料に基づき明らかにすることが、本研究の目的である。

教育実践は、記録がなければ、日々消えて行く運命にある。1970 年代から 80 年代の林の授業実践は、幸いにもまだ残っているものが多い。資料整理は、その補完を意味するとともに、アクティブ・ラーニングや汎用的スキルという観点からの見直し・改革が急速に進む現代教育のあり方を、本質的に見直すことができる視座の形成につながることを期待できる。

2. 研究成果

宮城教育大学附属図書館に蔵されている哲学者、教育学者林竹二（1906-1985）の資料は、林の遺族から寄贈されたもので、元々は宮城教育大学附属教育臨床研究センターに所蔵されていた。同大学名誉教授の本間明信氏、同大学教授の吉村敏之氏らのご尽力により、30 年以上にわたり保管されてきた。資料が保管されているロッカー毎に大枠では分類されており、これは同大学名誉教授の小野四平氏らによる 1997 年-1998 年の科研費基盤研究（C）（研究課題 09610233）『『教育における臨床の学』構築のための基礎研究』がその元となっている。「林竹二の授業論の検討」（松本匡平、『教育方法の探究 19 巻』2016, pp. 31-38.）の研究過程において、林竹二の授業論を研究するにあたり保管されていた資料は非常に貴重かつ有効な手がかりとなった。

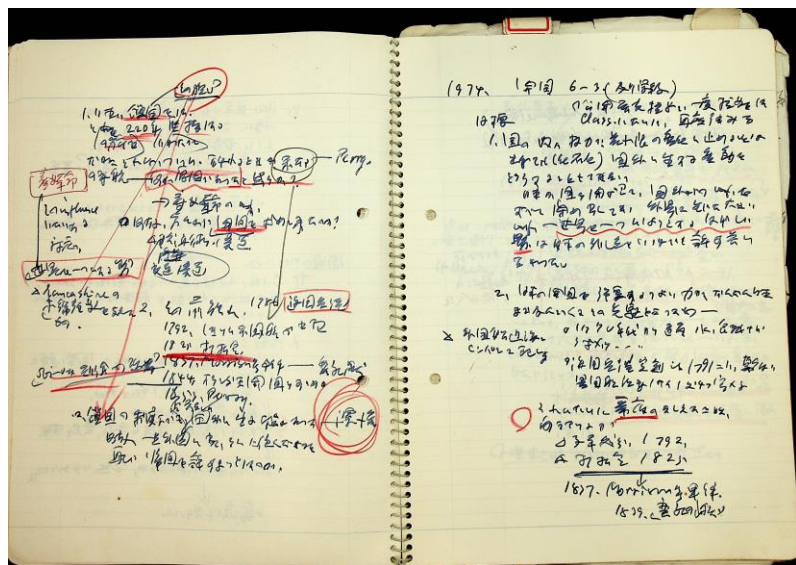
ただ、経年劣化が激しい資料も存在し、かつ、資料の中身を一つ一つ保存することは難しい面もあると考え、データ化し資料を保存することを最優先の課題とした。現在確認できるものとして保存できたのは、データ画像 121,342 枚分の資料である。

データ保存の方法は、以下の通りである。スキャナーとして CZUR 社製 ET16Plus を使用し、資料を一つ一つ画像として保存していった。大学院生ら 21 名の協力も得て、のべ資料保存作業として 700 時間以上をかけて資料のデータ化に取り組んだ。1 年間の期限、研究者の勤務および居住地と資料所在地の距離など、様々な困難を克服する必要があるが、かつ、研究費を大幅に超える支出が必要となったが、すべての資料をデータ化することができたことは、大きな成果であった。もちろん、単年度のみですべてを解決できるわけでもなく、今後、資料の詳細な分類や分析、また、細かな資料の補足や修正はもちろん必要にはなるだろう。残念ながら、資料の目次作成や詳細な分析まではできなかったことは、ただただ研究者の不徳によるものであるが、今研究活動を通じて得た知見は、今後洗練させていき、教育の本質とは何かという議論の支えになるよう、公開していきたい。

ここでいくつかの資料を紹介し、その資料の持つ可能性や今後の研究の見通しについて述べていく。

例 1) 「授業『開国』のためのノート」(1973 年 12 月)

林竹二の代表的な授業実践「開国」の原稿ノートの一部。1974 年及川学級、という文字が読み取れる。文字の判読が困難なものもあるが、林の授業準備の様子や内容の解明に役立つ。特筆すべきは、授業を重ねるたびに、原稿も何度も書き直している点にある。林が、授業の改善を何度も試みたことが実際に理解できる貴重な資料である。



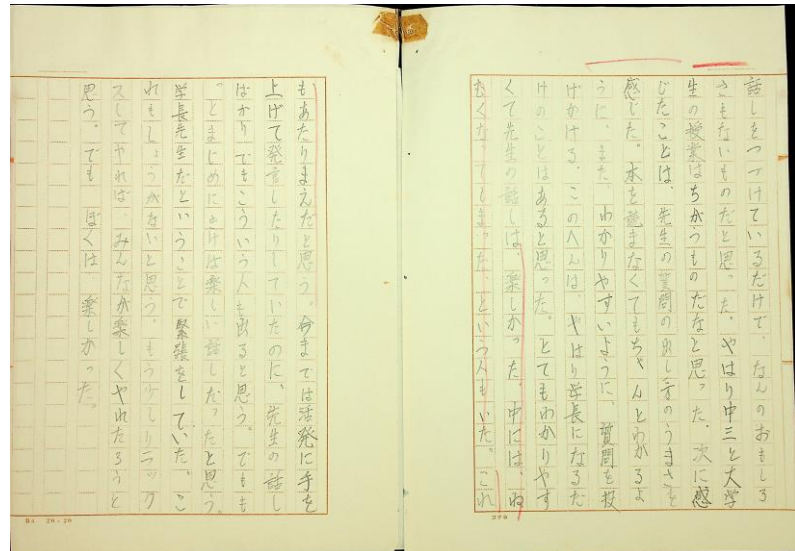
例 2) 1977 年湊川高校「開国」「創世記」授業写真の一部。

林の著作では、写真の学習者の姿から、深く考え学んでいるということがよく言及されている。この資料では、林自身が赤字で書き込んだものがあり、どの写真を選んで著作に入れたかがわかる。逆に言えば、林の選ばなかった写真もすべて保存されており、林自身の写真への選考基準がうかがい知れよう。これにより、林の授業への客観性あるアプローチが可能となる。



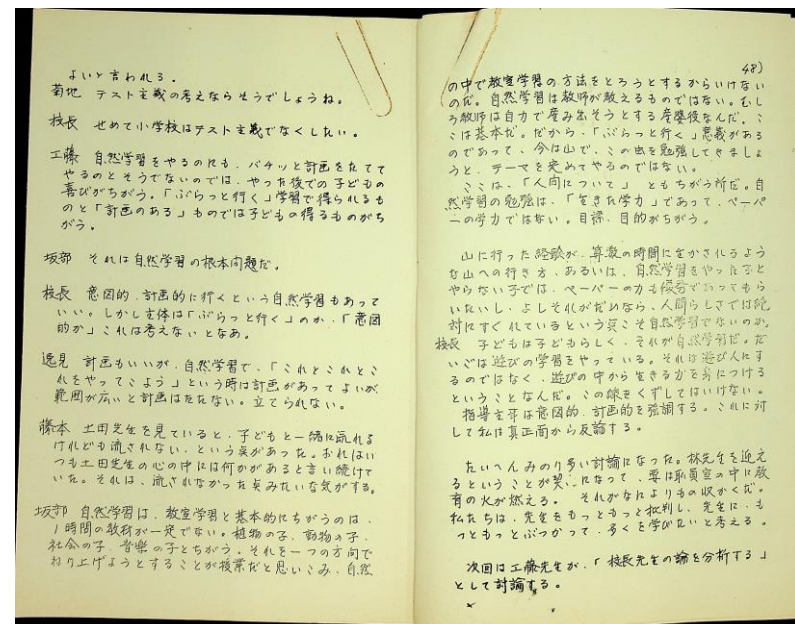
例 3) 附属中 3 年生授業感想文の一部。

林自身の授業論では、写真とこの感想文を根拠にした論説が中心となる。このように、林は児童・生徒の書いた作文を相当数保管していた。赤鉛筆、青鉛筆を用いながら、「○」「×」などをつけている。写真同様、どのような感想文を選び、また選ばなかったのがわかることで、林の授業への客観性あるアプローチが可能となる貴重な資料である。



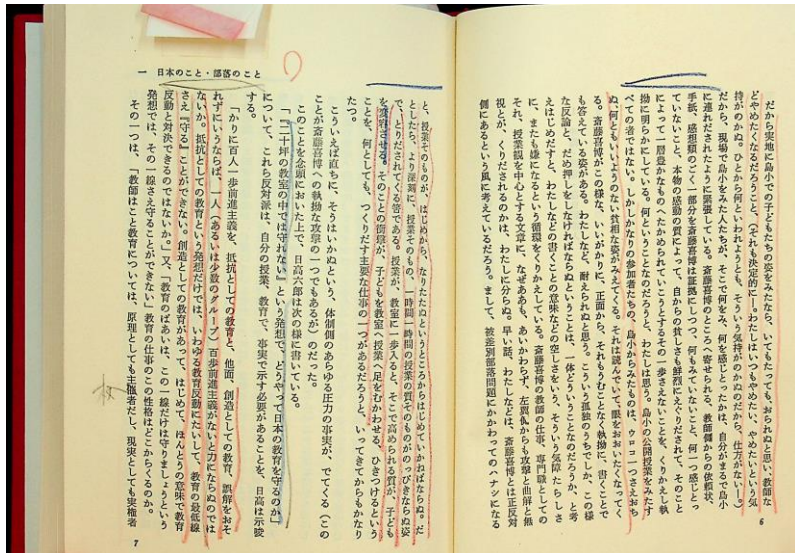
例 4) 各地の教育実践記録の一部。

林の元に各地の学校で実践された研究会や授業検討会の資料が寄せられており、それらを林は保管していた。林が講演会を引き受けた縁があるものや、林の著作の影響を受けて自主的に送付した例もある。当時の各学校における自主的な教員研修のあり方に林がどのように関わり、影響を与え、あるいは受けていたのが分析できる資料である。



例 5) 『部落解放教育の思想』(福地幸造, 1970 年, 明治図書.)

林が湊川高校、尼崎工業高校での授業実践に「のめり込んで」いった理由の一端が、このように林自身が書き込み線引きした資料から読みとることができる。林は、おそらくであるが、赤色で「肯定・同意」を、青色で「批判・検討」を意図的につけていたと考えられる。これは残された児童・生徒の感想文とも共通する。



以上 5 点を例として挙げた。林の授業構想ノート分析、児童・生徒の写真・感想文の選択から見える林の授業観、兵庫県部落解放研が与えた林への影響、という大きな課題が見えてきたが、これらの分析は今後の研究で明らかにしていきたい。そのためには、データ化した資料の詳細なリスト作成が急務である。同時に、これらの資料の公開に向けての問題点の整理と、個人情報に留意した公開方法の検討が必要となってくる。今後も継続して、宮城教育大学と同大学附属図書館との連携を模索しながら、研究を進めていく。

この研究をまとめていく時期とほぼ同時進行で、コロナ禍が社会全体に蔓延し、「with コロナ」のかけ声の下、教育の現場ではオンライン化が次々と進んでいった。そして、生徒 1 人 1 人へのケア、コロナ対策としての消毒作業、カリキュラムの柔軟な編成など、様々な問題に直面し、疲労困憊している教員の 1 人として、改めて教育とは何かを考えざるをえない状況におかれた。オンライン授業をすればそれで「授業」となるのかという疑問を抱きながら、改めて問われたものは何かを考えると、石井英真氏が指摘しているとおり、それは教員 1 人 1 人の「授業観」であるという結論に到達するのだろう。

<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/cms/wp-content/uploads/with%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E3%81%AE%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%94%9F%E6%B4%BB%E3%81%AE%E5%A7%8B%E3%81%BE%E3%82%8A%E3%81%AB%E3%81%84%E3%81%BE%E5%BF%85%E8%A6%81%E3%81%AA%E3%81%93%E3%81%A8.pdf>

であれば、専門的知見と哲学的洞察を踏まえた授業構想、沈黙の中に子どもの積極的な葛藤と対話の動態を見た授業鑑識眼、学び問うことへの入り口へと導くための授業のあり方、どの子たちも学びたがっているということの発見といった、林の数々の具体的な知見は、今なお色あせることなく、現代を照射する鏡として存在していると考えられる。人間が生身の人間に対する以上、そうすることで成長を見守り促すのが教育という営みである以上、林が目の中の学習者とともに学ぼうとした姿勢は、教員として学習者の前に立つ、あるいは横に並び伴走する際の原型を示していると言えよう。この原型をいま一度振り返ることが、コロナ禍によってもたらされた様々な衝撃や変化に動ずることなく、教育のあり方を考察する一助になることに疑いはない。

3. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1 件)

吉村 敏之(代表)、松本 匡平

発表標題：林竹二の求めた「教育の再生」—兵庫県立湊川高校での「自己の再造」

日本教育学会第 79 回大会、ラウンドテーブル、2020 年 8 月

4. 研究組織

研究協力者

研究協力者氏名：本間 明信、吉村 敏行、本田 伊克、石井 英真

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。